中嶋嶺雄（東京外国語大学教授・現代中国学）

# 毛沢東の〝影〟におびえる華国鋒の矛盾

**ニュース** ▶毛主席批判の壁新聞　北京　名指し、大きな波紋（11.20朝日）▶北京に「毛批判」の壁新聞　「鄧氏批判指示は誤り」　天安門事件で革命鎮圧（11.20毎日）▶北京に毛批判の壁新聞　階級闘争判断誤る　鄧追放や天安門　四人組を支持（11.20読売）▶中国で〝反文化大革命〟が始まった　毛批判の背景に鄧氏価値観、再び転換へ（11.21サンケイ）

「封建的ファシスト独裁」というような激しい言葉によって、壁新聞が毛沢東家父長体制を批判しはじめた今日の中国情勢の行方に、いま内外の注目が集中している。永年の毛沢東政治の内部でうっ積していた中国民衆の懐疑や不満は、こうして奔流のごとく勢いを得つつある。

そうしたなかでとくに注意して見るべき問題点の一つは、訪日後あわただしくASEAN三か国を訪れた鄧小平副総理が帰国した翌日の11月15日を期して、まず姚文元論文批判のかたちをとりながら、非毛沢東化の潮流が一斉に表面化したことのもつ意味であろう。『光明日報』や『人民日報』を導きの糸としつつも、呉文署名の一連の壁新聞シリーズ「民主が独裁を裁く」のようにきわめて系統的に高度の政治的内容を含んだ壁新聞が続々とあらわれたということは、いまや中国共産党内部に非毛沢東化・非文革化運動の司令部が、いわば〝党内党〟のかたちで形成されていることを物語っている。この司令部こそ――かつての文革直前の状況にきわめて類似しているが――呉徳・党政治局員が北京市長（革命委第一書記）を解任されたあとの党北京市委員会ではないかと思われる。そしてこの司令部には、秦基偉（北京部隊第一政治委員）、林乎加（北京市革命委第一書記＝〈北京市長〉）、それに〝三胡〟と見なしうる胡耀邦（党組織部長）、胡績偉（『人民日報』社長）、胡喬木（社会科学院長）らの鄧小平側近の旧実権派中堅幹部が集まり、彭真や呉晗、鄧拓、廖沫沙ら旧〝三家村〟グループとも、すでに協同関係が成り立っているのではなかろうか。

このように見てくると、今日の動きは、決して一時的な〝爆発〟としては終わらない重要な政治的・社会的意味をもっているといえよう。しかも、非毛沢東化の動きは、たとえば『毛沢東語録』の中止、毛沢東の言葉のゴチック印刷の中止など、すでに本年初頭から中国内部で着々と進行してきたのであった。

こうした状況のなかで、「四人組」をあれほど激しく罵りながら、毛沢東の責任にふれることがタブーであるという理不尽、そもそも江青女史は毛沢東夫人であったし、江青批判は、まさに中世の魔女狩りのごとく進んでいながら、毛沢東は依然として正しかったという論理の明白な矛盾が一挙に切開されようとしている。ついに毛沢東＝江青関係そのものにふれた壁新聞が出はじめたのも、当然の成行きであろう。余生を毛沢東批判に賭けることによって、中国民衆のあいだに潜在していたある種の〝ふっきれなさ〟を解き放ち、中国社会の現代化を大胆に推進しようとする鄧小平の執念――使命感といってもよい――は、いま、こうして現実の政治過程に反映しはじめたといえよう。

こうして、毛沢東批判が堰を切って奔り出した以上、文化大革命で台頭したリーダーたちの政治的立場は、きわめて困難になりつつある。「四人組」事件は、そもそも毛沢東家父長体制内部の権力継承をめぐる「喰うか喰われるかの闘争」だったのであり、そうしたなかでの華国鋒―汪東興らによる〝予防クーデター〟であったのだが、毛沢東家父長体制そのものが指弾されはじめた今日、「あなたがやれば私は安心だ（你办事我放心）」という毛沢東の〝お墨付〟を護持して権力を継承した華国鋒主席自身、論理的にはいよいよ危険な状況に陥りつつあると見なければなるまい。つまり、毛沢東の影によって政治的に台頭した華国鋒は、いまやその毛沢東の影におびえなければならなくなってきたのである。

このことが近い将来の華国鋒失脚をもたらすのか、それともいましばらく今日の体制を継続することになるのか、生殺与奪の権はいまや鄧小平らの手中にあるといえようが、いずれにせよ、事態はきわめて流動的だと見なければなるまい。